

【原著】

「志望理由書」を課すことの意義

— 学習材としての可能性 —

島田康行 (筑波大学)

AO 入試の出願書類としての志望理由書は、その内容、構成ともに画一化、定型化の傾向にあり、選考資料としての有効性は限定的である。一方、文章表現を学ぶ機会が乏しいまま大学に進学する学生も少なくなく、大学進学を目指す者にとっては志望理由書を書き上げる過程が文章表現を学ぶ数少ない機会になっている実態もある。本稿では、受験生が志望理由書を書き上げる過程に着目し、そこで受験生に何が起きているのかを探ることで、AO 入試に課される志望理由書の学習材としての可能性について考察する。

1 研究の背景

大学進学を目指す高校生は、高等学校においてどのような文章表現の指導を受けた後、大学に入学するのだろうか。その実態の一端を報告した島田 (2008b) は、国立 T 大学の理系教育組織の初年次生 65 名を対象に行った調査の結果を次のように記している (原文は縦書き。表記を一部改めて示す)。

高校の「国語」の授業において、400 字程度以上のまとまった長さの文章を書く機会がどれくらいあったかを尋ねた。その機会は決して多くはないと予想したが、実際には、3 年間を通して平均で 3 回に満たないという結果であった。

… (中略) …

つぶさに見ると、3 年間を通して「0 回」と答えた者が最も多く、65 名中 30 名に上る。そして、3 年間を通して 3 回以下と答えた者が全体の 70% 以上を占める。

調査対象となった学生には、いわゆる進学校の出身者が多い。その高校時代の「国語」の学習状況は、たとえば、「書くことよりセンター試験で点を取れるような学習をした」、「文章表現の学習はまったくしなかった。基

本的に大学入試の勉強をしていた」のように語られる。

その一方で、「国語」の授業ではなく「大学入試対策として小論文を何回か書いた」、「小論文模試で二、三回書いた」など、大学入試対策の一環として文章表現のトレーニングが行われている実態も垣間見える。「国語」の授業では 3 年間で 3 回以下しか文章を書かなかった 45 名も、そのうち 25 名 (55%) は入試対策としてまとまった分量の文章を書く機会があったと答えている。

高校時代にまとまった分量の文章を書いた経験の多寡あるいは有無には、大学入試の受験科目、たとえば「小論文」の有無が大きく影響しているようであり、高校生の中に「推薦入試を受けなかったので文章表現の学習はしていない」、「進学校であったし、小論文が入試科目になかったのでほとんど書かなかった」(下線は筆者)といった意識を生み出すことにもなっている。

このように、まとまった分量の文章を書いた経験が乏しいまま大学に進学する者が多数ある中で、推薦入試に備えて「小論文」を書く練習をしたり、AO 入試に出願するために「志望理由書」を書いたりすることが、高校生にとって文章表現のトレーニングの数少ない機会となっている一面もある。

島田 (2008a) は、出願書類として提出された志望理由書の内容と構成について考察し、その画一化、定型化の傾向を指摘した。そして、ほとんどの受験生が教員などによる徹底した支援を受けて出願していることをも踏まえ、「こうした傾向が進むと (志望理由書の) 選考資料としての存在意義自体が問われることになりかねない」とも述べた。

しかし、その一方で、文章表現の経験が乏しい受験生にとって、長期間にわたって自分と向き合い、まとまった分量の文章を書き上げることは、貴重な学習経験となっているはずでもある。とすれば、志望理由書を課すことには、そうした学習の機会を提供するという独自の意義を認め得るのではないか、すなわち、志望理由書には、選抜資料としてのみならず、受験生の文章表現の学習材としての価値をも認め得るのではないか。本稿はそうした問題意識を出発点としている。

2 目的と方法・手順

志望理由書はどのように書かれるのか、その過程で受験生に何が起こるのか、その詳細を可能な限り具体的に知ることが当面の目的となる。そして明らかになった事実をもとに、志望理由書の学習材としての可能性と、AO入試にそれを課すことの意義を改めて考えることが、その先の目的となる。

そこでまず、国立 T 大学の平成 21 年度 AO 入試合格者を対象として、2 種類の調査を行った。調査の概要は次のとおりである。

方 法：質問紙の郵送による

対 象：平成 21 年度 AO 入試合格者 (入学手続きをした者) 56 名

時 期：平成 21 年 1 月下旬配付
平成 21 年 2 月下旬回収

回収率：98.2% (55 名。回答は無記名としたが、所属する教育組織の記述回答を求めた。)

内 容：調査 I 「志望理由書を書いた経験について」 (有効回答：54)

調査 II 「高校で受けた“文章表現”の指導について」 (有効回答：48)

3 結果

3.1 高校「国語」における文章表現の経験

調査 II は、前述の島田 (2008b) で報告した、平成 20 年度初年次生対象の調査と共通の内容である。その結果の概要から、調査の対象となった AO 入試合格者が受けてきた文章表現の指導を概観する。

まず、高校の教科「国語」の授業において 400 字程度以上のまとまった長さの文章を書く機会が「何回」あったかを尋ねた。今回の調査の結果 (図 1a) を、島田 (2008b) の調査結果 (図 1b) と並べて下に示す。

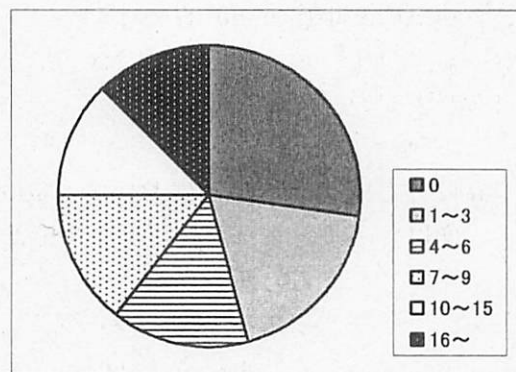


図 1a (H21) AO 入試合格者の「文章表現」経験

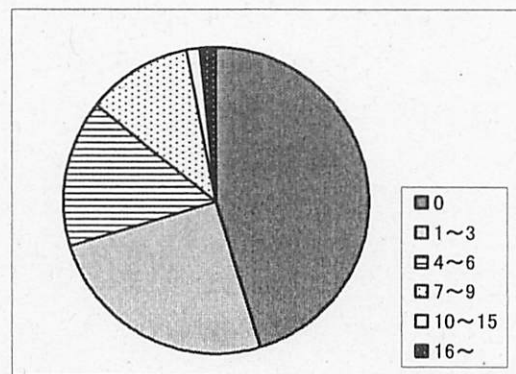


図 1b (H20) 初年次生の「文章表現」経験

今回の調査の対象となった本年度 AO 入試合格者については、3年間を通じて「0回」という回答が27%、「1~3回」という回答が19%であった。両者の合計が70%に達した島田(2008b)の調査とはいささか様相を異にしている。「4~6回」「7~9回」「10~15回」という回答もそれぞれ15%近くあり、本年度 AO 入試合格者は、島田(2008b)の調査対象となった初年次生⁽¹⁾に比して、教科「国語」の授業における文章表現の経験がやや豊富である。添削指導(「国語」以外の場面を含む)を受けた回数も1年次:1.7回、2年次:2.7回と、昨年度調査した初年次生の結果(1年次:0.7回、2年次:0.8回)を上回っている。

3.2 高校における文章表現の機会

さらに、「国語」の授業以外でまとまった文章を書いた経験を尋ねた。島田(2008b)の調査結果では、入試対策としての小論文の演習という回答が目立ったが、今回の調査でも同様の傾向が指摘できる(20名、42%)。

しかし、今回はそれ以外にも卒業研究や自主研究、部活動(創作、実験レポート)、「総合的な学習の時間」、小論文コンクールなどで文章表現の機会を持ったという回答が多く挙げられている(計25名、52%)。

3.3 志望理由書の執筆過程

調査 I の回答者 54 名を、進学する教育組織によって大別すれば、文系 9 名、理系 27 名、複合系 5 名、実技系 13 名となる。また、高校における文理のクラス分けで見ると、理系クラス 21 名、文系クラス 18 名、その他 15 名で、実技系組織に進学する 13 名のうち 10 名は文系クラスに所属している。

T 大学 AO 入試の主な出願書類は、志望理由書(800字)と、自己推薦書(形式・分量自由)、調査書である。調査 I は、このうちの志望理由書の執筆過程について具体的に尋ねたものである。

3.3.1 執筆の時期と期間

はじめに執筆の時期と期間を尋ねた。図 2 はその結果である。「書き始め」とは、執筆のためのメモや下書きなども含めて書く作業を始めた時期であり、「書き終わり」は、提出した形に書きあがった時期である。

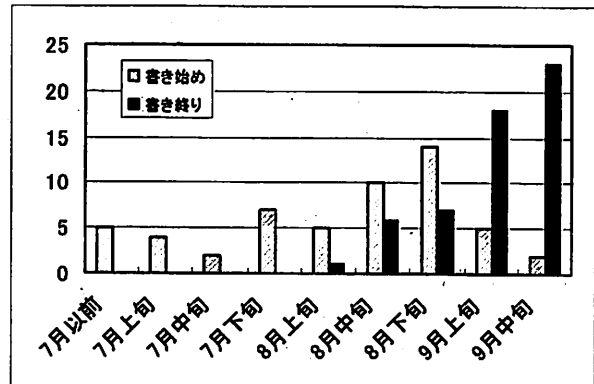


図 2 志望理由書の執筆時期

書き終りの時期は9月上旬から中旬に集中している⁽²⁾が、書き始めの時期は一定しない。8月中旬から下旬を中心とするが、7月中に書き始めた者も13名、それ以前と答えた者も5名、また提出期限直前に書き始める者も少数ながらあった。執筆にかけた期間は平均で約28日、4週間程度という結果である。

多くの者が提出間際に完成させていたのは当然のことといえようが、この入試の学生募集要項の公表が6月下旬であったにもかかわらず、7月以前に書類を「書き始め」ていた者が5名あったことは注目に値する⁽³⁾。

3.3.2 修正の過程

書き始めてから書き上げるまで、平均4週間ほどの時間をかけて、受験生は志望理由書の執筆に取り組む。この間、ほとんどの者が高校教員や塾・予備校の講師などからさまざまな指導を受けている。

今回の調査では、志望理由書の執筆に関して何らかの指導を受けたと回答した者は49名(92.5%)に上った⁽⁴⁾。

表 1 に示すように、主として指導に当たっているのは、担任の教員に加えて、国語の教員、部活動の顧問教員など（表中では「その他」）である。

表 1 誰の指導を受けたか

主な指導者(2項目まで回答可)	
担任教員	23
国語教員	13
進路指導教員	9
予備校・塾講師	5
家族	8
先輩(AO入試経験者)	2
先輩(AO入試未経験者)	1
友人	1
その他	15

自由記述の回答から、指導を受けた時期を調べてみると、下書きを終えた後、すなわち「とりあえず一度書いてみてから」というタイミングであることが多い(36名)。そこで誤字脱字や語句表現のチェック、構成への助言を受けて書き直す、という手順が一つの典型のようである。

一方で、書き始める前に指導を受けたという回答も散見される(11名)。「書き始める前に方向性を議論した」のように、書くべき内容と構成について事前に指導を受けたという例である。「メモの段階で、内容の過不足を指摘してもらった」「制限字数にとらわれずに書き、伝えるべきことを話し合っただけで内容を絞ってもらった」といった支援と併せて、下書きを書く前に指導を受けた例といっていよう。

なお、書き始める前の準備としては、これまでの活動や研究の実績を整理する以外に、志望先の教育内容やカリキュラム、アドミッションポリシーの確認、大学の特徴などに関する情報収集などが多く挙げられたほか、志

望理由書の書き方を参考書で調べたという回答も散見された。

このような指導・助言を受けて、受験生は志望理由書を書き直す。書き直した回数としては4~6回(21名)、または1~3回(19名)が多数を占めるが、それ以上の者も少なからずある(13名)。20回以上(4名)、50回以上(1名)と回答した者もあった⁽⁶⁾。

3.3.3 執筆を通して

志望理由書を書いた経験は、志願者に何をもちたのか。「文章表現上の改善点」と「自分自身に起きた変化」の二つの観点から、自由記述による回答を求めた。

文章表現の具体的な改善点は、

- ・ 誤字脱字がなくなった。
- ・ 内容が整理され、論旨が明確になった。
- ・ 語句の用法や言い回しが適切になった。
- ・ 構成が明快になり、論理が一貫した。

など、諸方面に及ぶ。回答にはこれらの内容を複数挙げたものが多い。指導を受け、書き直しを繰り返す中で、自らの表現を客観的に見ようとした形跡を認めることができる。

自分自身に起きた変化としても、

- ・ 要約力を含め、文章表現力の重要性を再認識した。
- ・ 相手を意識して書くようになった。
- ・ 効果的な自己アピールの方法を工夫するようになった。

など、表現力の向上に言及する回答もあるが、数は少ない。この問に対する回答で多数を占めるのは、

- ・ 大学で学ぶ目標が明確になった。
- ・ 大学で学びたいという意欲が高まった。
- ・ 自分の実績を客観的に振り返ることができた。

など、自己理解の深まりに言及したものである。

- ・ 大学や志望先について理解が深まった。とする回答もわずかながらある。

以上をまとめれば、修正を繰り返しつつ志望理由書を完成させる作業を通して、自分の実績を客観的に振り返り、自分の目的や問題意識が明確になった、そのことによって大学への進学意欲も高まった、という内容の回答が多いということになる。

3.3.4 合格者による位置づけ

次に、志望理由書のような文章がこの入試の選考に必要なかどうかを尋ねた。質問は、この入試の「選考に必要な」という表現だったが、実際の回答には、自分にとって有益だったかという観点から答えたものも多く見られた。

ほとんどの回答が「必要」、あるいは「あってもよい」とした。その理由としては「この入試では志望理由の明確さが重要な判断の基準である」と考える。その確かさを測るための資料として重要である」という趣旨のことがしばしば挙げられた。

例外的に「なくてもよい」とした回答は、いずれもその理由を「自己推薦書でも同趣旨のことが表現できるから」とするものであった。

志望理由を明確に述べることは重要なことであるという認識が、この入試の志願者には強固にあるらしい。

一般に、AO入試において志望理由の明確さが選考の際の一つの基準となることはあるだろう。ただ、実際に、それをどのように判断し、どの程度まで選考に組み入れていくかは、各大学によってまちまちであろう。T大学は志願者に対して、志望理由の明確さを選考上どのように評価するのかを明確にしているが、志望理由書を課していること自体がメッセージとなって、志願者がこうした認識を持つに至ったものと思われる。

最後に、志望理由書を執筆する過程で産出された下書きやメモを保存してあるかどうかを尋ねた。結果、54名中46名(85%)が、

保存していると回答した。

4 考察

T大学入学者には、高校における文章表現のトレーニングが乏しいものが少なくない。進学校になるほど教科「国語」の中でまとまった分量の文章を書く機会は少なく、受験勉強の中で必要に応じて取り組んでいる場合が多い傾向にある。こうした状況の中で、自分の受験に小論文や志望理由書などが課されていなければ、文章表現を学ぶこと自体が重要と認識されないという事態が起きている。

T大学AO入試の合格者も、受験対策の一環として文章表現に取り組んでいたという者は多く、それが文章表現を実践的に学ぶ貴重な機会となっていることが窺える⁶⁾。今回の調査でも、志望理由書の執筆を通して自らの表現に、より意識的になったと回答した者が若干ながら見られる。

AO入試の志望理由書は、書き手自身の経験や関心、また問題意識や具体的目標が、必然的に中心的な題材となる、すなわち、書くべき内容の中心が初めから自分の中にあるという点で、解答するために外部の対象に問題意識を持つことを強いられる「小論文」とは異なる。こうした特徴を持つ志望理由書を入試に課すことは、志願者に深く自分と向き合うことを求め、そこに見出された自己の内面を筋道の通った文章にすることを求めるということになるだろう。それはつまり、そのような深い自己理解に基づく、論理的な文章表現を学ぶ機会を提供するということにもなるだろう。

大部分の高校生は教員の指導を受けながら志望理由書を書いている。その指導は、今のところ下書き後の添削という形でなされていることが多いようである。が、一般に、執筆後の添削だけでは、書き手の論理的な思考・表現力の育成に大きな効果は期待できない。よりよい書き手を育てるための方策は、

具体的には高校までの「国語」教育の中で考えられるべきものであるが、志望理由書は、そうした実践の学習材の一つとして大いに活用可能なはずである。

また、今回の調査では、回答者の多くが、志望理由書を 8 月中・下旬から提出期限際の 9 月上・中旬まで、4 週間程度の期間で書いていた。学生募集要項の公表直後あるいはそれ以前から書き始める者や、数ヶ月をかけてこの書類を書き上げる者もあった。彼らの中には、その長い期間を通じて、目的意識を明確にし、学習への意欲を高め、志望する大学や教育組織についての理解を深めた者もあっただろう。志望理由書を課すことは、そのような経験を積むことを受験生に促すことにもなるはずである。そこにもまた志望理由書を課すことの独自の意義を見出すことができるだろう。

合格者の中には、志望理由書の執筆の過程は目的意識の明確化と学習意欲の喚起のために重要であったと回答した者も多く、この書類が AO 入試に課されることの意義を、出願者も積極的に捉えていると考えられる⁽⁷⁾。ある者は、志望理由書の下書きや執筆のためのメモを保存している理由を「折に触れて自分の意思を確認するために重要なものである。初心を忘れないように、繰り返して読むことができる」と説明している。合格者の 85% がそれらの資料を今も手元に残しているのは、彼らがこの書類を執筆する「過程」に何らかの意義を見出していることを端的に示すものと考えられるだろう。

5 結語

以上、本稿では、文章表現を学ぶ機会が乏しいままに進学する大学生が多い中で、AO 入試の受験生が志望理由書を書く過程を詳らかにし、その過程で受験生に何が起きているのかを探ることで、志望理由書の学習材としての可能性を検討し、この入試に志望理由書

を課すことの意義を考えてきた。

さしあたり、志望理由書の執筆を通して合格者の文章表現力はどのように高まったのか、また、明確になった目的意識や意欲が入学後の学習にどのように結びついているのか、それらを具体的に捉えていくことが課題として残されている。さらに、志望理由書を選抜資料としていかに活用すべきかという、より大きな問題も残ったままである。今後の課題としたい。

また、入学してくる学生は、それまでにどの程度、どのような文章表現の指導を受けてくるのか、それは大学入試とどのように関連しているのか、今後さらに詳細なデータをそろえていくことは、入学した学生に対する文章表現の指導の在り方を考える上でも重要になるであろう。

注

- (1) 調査対象となった初年次生には AO 入試による入学者が含まれていない。
- (2) 9 月中旬は、平成 21 年度入試の出願期限である。
- (3) 過年度版の学生募集要項が web で公開されており、志願者はこれを参照して書類作成の準備を始めることも可能である。
- (4) 実施初年度から年を追ってその割合は高まっている。島田 (2007) 参照のこと。
- (5) 昨年度の合格者の中にも、パートナー(予備校のトレーナー)と議論を重ねつつ、半年近くをかけて 30 回以上書き直した例があった。
- (6) ただ、昨年度の調査結果(島田 2008b)に比すれば、彼らは教科「国語」における文章表現の経験にやや恵まれ、さらに「国語」以外にも文章表現の機会を持つ者が多い。文章表現に対する抵抗感が相対的に薄い者が多く選抜されている、あるいは、文章表現に熱心に取り組む高校の出身者に有利な選抜になっている可能

性がある。T 大学 AO 入試合格者の出身校には総合学科やSSH指定校などが多く、一般入試の合格者が多い高校とは必ずしも重ならないことは、島田 (2008a) に報告した。

- (7) もちろん、こうした回答の評価には慎重でなければならないし、そのような意識が入学後どの程度維持されるのか、また、学習状況にどう反映されるのかといった追跡調査とあわせて考える必要もあるだろう。

参考文献

- 石川巧 (2008b) 「〈小論文〉に求められているもの」『日本語学』vol. 27-13, 30-45.
- 島田康行 (2007) 「アドミッションポリシーに応じた入学前教育の試行」『大学教育学会誌』29-1, 169-175.
- 島田康行 (2008a) 「AO 入試『志望理由書』の研究」『大学入試研究ジャーナル』No.18, 45-50.
- 島田康行 (2008b) 「大学初年次生を対象とした読み書きの指導」『月刊国語教育研究』No.437, 50-57.
- 島田康行 (2008c) 「『国語』の試験が測るもの」『日本語学』vol. 27-13, 4-12.
- 渡辺哲司 (2008) 「文章表現・口頭表現を苦手とする大学初年次生のプロフィール」『大学教育学会誌』30-1, 123-128.